

兒童文學論

石井桃子
著

渡辺茂男

監

「アン H. スミス

児童文学論

石井桃子
瀬田貞二 訳
渡辺茂男

岩波書店

児童文学論

昭和三十九年四月二十日 第一刷発行 ©
昭和四十四年八月三十日 第七刷発行

定価六百五十円

訳者 石井 桃二
瀬田 貞二

渡辺 茂男

発行者 岩波 雄二郎

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行所 株式会社 岩波書店

精興社印刷・三水舎製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

まえがき



本書は、子どもによい本を選んで与えるための、万事ゆきとどいた指導書であることを意図しているものではない。それよりむしろ、よい作品というものには——だれもが知っている本でも、これから出版される本でも——かならず具わっているはずの特質、よい作品の資質というものを、はっきりと確認する道をさし示すが、この本の意向なのである。

そこで、以下の本文には、子どもむきのよい本のリストはかかけていない。この本のねらいは、子どもの本を文学として考えること、また、子どもの本を文学として評価するのに役立つ、いくつかの基準を見いだすこと、なのである。

子どもの本は、一般文学とは無縁な、真空地帯にあるものではない。児童文学は、一般文学の一部門であり、ほかの文学形式とまったく同じ批評の基準に従わなければならない。これが根本的な原則である。この根本の考え方こそ、どのような種類の文学を評価する場合でも、よい本を選び出すという作業の底に、かならずなければならぬものである。だから、子どもの本を評価するにあたって、児童文学がりっぱな価値と意義をもつ文学だという確信が、最も必要な態度となる。そしてこういう確信は、まず、子どもの本について正しい知識をもつこと、さらに、文学の古典とされるよい作品に

見いだされる文学上の基準に照らして一作一作を批判的に読むこと、この二つによってはじめて得られる。

子どもの本を集めておく場所では、家庭の書棚であろうと、学校図書館や公共図書館であろうと、そこが、いったん、児童文学のゆたかな遺産である「古典」を忘れてしまうと、せっかくそうして本を備えながら、その長所を役立てるところか、かえて凡作をひろめる手段にすぎなくなる。

私たちの現代生活には、子どもと本とを、とかくひき離しがちにする、たくさんの要因がある。それだからこそ、できるかぎり努力をつくして、子どもと本とを結びつけることが、ますます願わしくますます必要となってくるのではないだろうか？ 私たちが今日、なにか社会的な働きかけをしなればならないというのであれば、子どものためによい本を、と訴えかけてもいいのではないだろうか？ かつてどの世界、どの時代に、今日ほど深刻に、質が——質をあやまらずに認め、質のよさを評価することが——必要とされたことがあっただろうか？

児童文学のもっともよい作品を見つけだし、ひろくそれを知らせるといふ図書選択の機能が、どれほど大切なものか——それがこの本のテーマである。凡作のたぐいを大目にみることは、よい本を選び、文学の意義をつかむという目的をあやまることである。

児童文学は種類が多く、また作品も多様であるために、その極めつきの良書の一冊一冊をとりあげて、くわしく論ずることは、とうていできない。ここに分析しようとして選んだ本は、不朽の質をも

った、たくさんの本のなかから、ひとりの人間が個人的に選んだのであって、ここに選ばれた本だけが、とくに入念に研究され分析されるべきものだという意味ではない。ある本にたいする個々の人の反応は、人ごとにちがうのであって、本を商品として、あるいは教科書のような用具として論ずる時は別として、文学として論ずる場合は、個人的な確信こそよりどころとなってくれらるものである。それに、児童文学は、学術的なアカデミックな研究の対象ではなく、楽しくて、実りゆたかで、限りない報いのある分野なのである。

この本を書いているあいだ、私は、上司のトロント図書館長チャールズ・R・サンダーソン博士から、たえず指示と激励を受けた。また、トロント「少年少女の家」の職員諸氏からは示唆と助力を、私の秘書フランセス・グレーからは貴重な援助を得た。ワシントン公共図書館のM・エセル・バブと、ワシントン国立美術館のチャールズ・C・ストットラーには、絵本の章について、助力をいただいた。しるして、厚くお礼を申しあげる。

リリアン・H・スミス

目 次

まえがき

第一章	児童文学の問題	二
第二章	児童文学の系譜	六
第三章	批評の態度	一六
第四章	昔 話	二六
第五章	神々と人間	三六
第六章	叙事詩とサガの英雄たち	四六
第七章	詩	五五
第八章	絵 本	六三
第九章	ストーリー	七三
第十章	ファンタジー	八三

	第十一章	歴史小説	三〇〇
	第十二章	知識の本	三〇六
	結び		三〇七
訳注			三五二
あとがき			三六九
索引			

兒童文學論

第一章

ポール・アザール*にとって、子どもの本の領域は、教師と両親と図書館員だけにまかせておけばよい、というような分野ではなく、人間のなしとげた仕事、到達した知識全体にかかわるものである。かれは子どものための文学を、創意のある作品のもつ推進的な力、普遍的な力に結びつけて考えていた。どこの国の作品であろうと、子どもおとないずれにむけて書かれようと問題ではなかった。そしてそういう本を、かれは、「芸術の本質そのものに忠実なもの」と、うたいあげている。

フランセス・クラーク・セーアーズ* 『本・子ども・

大人評』(『ライブラリー・クォーターリー』誌)より

児童文学の問題



十八世紀に出た『ニュー・イングランド初歩読本』をひらくと、そのなかに、ひとり子どもが本を読んでいる一まいの稚拙な木版画がある。その小さな絵のむかいがわに、よく引用される二行詩がある。

私の本と 私の心

はなればなれになりはせぬ

子ども心のこの性質。好きで選んだ本となれば、ほかにどんなよさそうなものがあってもふりむかず、ただそれだけに愛着して離さない子どもの気持。これは、ジョン・ニューペリが当時の幼い紳士淑女君のために「かわいいきれいなポケット本」を作りだしてからというもの、つまり子どものための本があらわれてからこのかた、作家と出版者と本屋とお客とを、まごつかせてきたところである。子どもがその読む本に何を求めているかということについては、どんな方式を立ててみても、おとなのいさく確信のなさや当惑の念を解決してくれないだろう。「子どもはああいう本が好きだ」とか、

「こういう本はきらいだ」とかいうことが、確信をもって主張できるものではない。けれども、それを知るには、どこを、どのように探ればいいかということがわかれば、私たちにも、いちおうの見当がつく。たとえば、いま、新しい子どもの本が出て、それが、またもう一つの『アリス』、あるいはもう一つの『宝島』や『トム・ソーヤー』が現われたという声にむかえられたとしたら、子どもたちがその新しい本のなかに、かれらの求めているものを、見いだしたものと認めていいのではなからうか？ その新しい本が、今までに愛読されてきた本と肩を並べうるといことは、ルイス・カロールやステイヴンソンやマーク・トウェーンの作品のもつふしぎな魅力を、どの程度にかもっているということになるわけではなからうか？

というのは、それらの作品には、じっさいにふしぎな力が具わっているからである。それは、あの「ハメリンの笛吹き」^{*}の調べが子どもたちをひきつけたように、読む子どもたちを魅了するふしぎな力で、それを定義することはむずかしい。このふしぎな力の本質がいちばんはつきりと見いだされるのは、子どもたちが何代も変らぬ愛着をもって読み、今だに読みつづけている作品である。そういう本になると、最新のベストセラーによってすぐにとって変えられるおとなの本などが、めったに得ることのできない不朽不滅の位置を得ているように思われる。

ある特定の子がどんな本に愛着をもつようになるかということは、かならずしもわかるわけにいかないが、子どもたちが、なぜ本を読むのかということなら、それほどわかりにくくはない。子どもた

ちがいったん本を発見すると、読書の楽しみをおぼえるようになるのは、一般読者と交りがない。おとなたちと同じように、子どもたちも、ほかの方法では得られない種類の経験を、読書のなかに見いだしてきた。ジョン・リヴィングストン・ロウズの書いた『読書について』という小さな本に、「わしは楽しみのないことは、何もせぬ」というモンテニユの銘を借用して、その理由を、ロウズはつぎのように述べている。「一度とらえられたあの子どもっぽい熱中というものは、めったになくなるものではない。そしてたとえば、コールリッジが『千一夜物語』に夢中になったことと、ジョン・キーツがシェイクスピアにぞっこんほれこんだこととのあいだに、本質的なちがいはない。」⁽¹⁾子どもの人生経験は、当然、その子の環境の狭い範囲のなかに限られる。子どもが求めているのは、そのような境界を一気にのりこえてゆく道なのである。そしてひとたび子どもが、本のなかにその道を見つけると、その瞬間の子どもの飛躍は、おとなには、まるで翼が生えたようにみえる。一方その時、子どもは、かれの眼にはなくなつたもひとつしいその境界を、いともやすやすと、喜び勇んでとびこえてしまふのである。

この世のどんな強制をもつてしても、子どもが読みたくない本を、むりに読ませておくことはできない。自分たちの選択の自由を、子どもたちは、たいしたたくみさと頑強さで守りぬく。もちろん子どもたちにしてみれば、どうして自分がこの本をはねつけて、あの本にしがみつのかというわけを知らないだろう。子どもたちの判断力は、めったに分析的でないからである。しかし、それは、ある

純粹なもの——楽しんでに根ざしている。「楽しみのない」場合は、もし読んだとしても、いやいやのことなのである。

子どもが本を選ぶ範囲は、いつも手近にあるものに限られるだろうし、それはまた、大部分がおとなの考えしだいになるだろう。子どもはどんな本が好きか、むしろ好きにならなければならぬか、について、おとなの側にはある誤った考えがあって、そのために、本を愛し読書を愛するということを知らせたいおとなの当の目的が、かえって達せられなくなる。もしこういうおとなの誤解がひろくゆきわたってしまったら、いったい子どもはどんな本を手渡されることになるか。その影響は由々しいことになるだろう。

この科学万能の時代にあつて、私たちは、私たちの子どもについても科学的になつた。私たちは、子どもたちを方式におしこめた。私たちは、IQ(知能指数)とか基本語彙とか治療的読書とかの術語で、子どものことを考えている。そして、ひどくもつたいをつけ、ことばは、ごくごくやさしいのを使つて、これなら子どもたちにもわかるだろうという調子で、かれらを取りまく世界を、子どもたちに説明してやるのである。

それ自身限りなくひろがる地平線をもち、たえず求め、求めるものに手をのばし、おとなの眼をすりぬけてゆく子ども心について、私たちはどれほどはつきりと、知っているだろうか？ 奇跡に親しみ、奇跡をつねに友とする子ども心とは、何であろうか？ おそらく私たちは、科学的方法を信ずる

現代の傾向のために、子どもの内奥に秘めた能力を信ずることを忘れていたのである。その能力は、年齢や発育のグラフでは測れない。こういうまちがいが起こるのも、ただ私たち自身が、この能力、^{ヴィジョン}夢を求めてゆくこの熱意を、とうの昔になくし、それを忘れてすでに久しくなるからである。

『わが愛読書』の序文で、著者クリフトン・ファディマンが、こういう話を述べている。かれがある時、ヘンドリック・ヴァン・ルーンの子どもの読みものの草稿に眼を通して、子どもにわからないように思われたいくぶん長いむずかしい文章を、著者に指摘したことがある。すると、ヘンドリック・ヴァン・ルーンの答えは、「ぼくはそれをわざと入れたのさ」というだけだった。そしてクリフトン・ファディマンは「後になって、かれのいった意味がわかった」と述懐している。子どものためのすぐれた作家は、言うべきことをもっている。そしてかれは、いちばんよい方法でそれを言い、子どもたちがわかってくれることを信じている。ルイス・カロールやケネス・グレアムのような作家が使っていることをしらべてみると、それがわかる。

ウォルター・デ・ラ・メアは、これをつぎのように述べている。

私は、何事にも最良のりっぱなものだけが、子どもにふさわしいものだということを、よく知っている。それからまた、後になってから、あの昔の日々、ほとんど忘れはたような幼いころの、ぞくぞくする喜び、口にもできぬ楽しさや幸せ、また恐れや嘆きや苦しみを、つかのま想い出すことが、ときおりはどうやら(どうやらにしても)できることも、知っている。まさに、私は、

あの馬、あのカシの木、あのデイジーを、きらっと一瞬、見るのである——すぎた昔のいつやら見た時のままに、あの時の心とあの時の感覚そっくりに。その経験は、啓示⁽²⁾だった。

このように子どもというものを考えれば、私たちは本能的に、凡作や駄作をはねつけることになるだろう。真のねうちのある本、誠実で真実^{ヴェリジョン}で夢のある本、読んで子どもが成長できる本だけを、子どもの手に渡すことになるだろう。なぜなら、成長することが、子どもの天性だからである。子どもは、じっとしてはいられない。子どもは心身の変化と活動なしではいられない。子どもの想像力をかきたてない読書、子どもの心を伸ばさない読書は、子どもたちの時間つぶしになるばかりでなく、子どもを永久につなぎとめることができない。かれらは、読書という手段^{メソッド}で満足できなければ、すぐまた別の手段におもむくだろう。

子どもたちが、読書のなかから、永続するものや、たしかなねうちのあるものを、かならずとりにてゆくのは、そういうひたすら成長しようとする根強い本能によるのである。子どもほどたしかに自分によいと思われるものを、しっかりつかんで離さないものはない。子どもは、不朽のねうちのある本にだけ、成長に必要な材料を見いだすことができるからである。

ひとりの子どもにとって、ある一冊の本が、どういう時によい本になれるかという点、その子がその本によって、一つの貴重な経験を得た場合である。そういう本を読んで、しんに楽しんだ子どもは、いちだんと成長して、かれの人間形成に何かを加えたことになる。それによってその子は、今まで以

上に新しい感じ方ができ、新しい考え方ができるようになる。そしてそれが、その子をさらにつきの新たな経験——それがどんなものにしても——にみちびいてくれる。その子は、もはや奪われることのない永続的なものをかち得たのである。

子どもたちが、身体の成長と同様に、読書にも段階を経てゆくことは、たしかである。ある子は、昔話を読む段階から、ヴァイキング(中世初期のノルマン人。海賊。民族移動につれて侵略植民した)のことを書いた本に移ってゆき、さらに大きくなると火星に興味をむける、ということになるかもしれない。しかし、その子の昔話によって培われた想像力は、成長をとめることがないだろう。そしてヴァイキング物語を読むと、遠い過去から現代まで人間の旅してきた長い道、つまり歴史というものが、心に残るだろう。その子はまた、この地球以外の他の世界について驚いたり推測したりすることから、宇宙にたいする神秘感をもつことになるだろう。こうして、その子が「楽しみをもって」読むものはすべて、これからの読書の基礎となり背景となって、その子のなかに、もっと読みたい欲望と、読まずにいられない切実感とをかき立てることになるだろう。

現代の子どもたちであろうと、いつの時代の子どもであろうと、子どものための「傑作」がいつも手のとどくところにおいてあるかぎり、その文学遺産をそうやすやすと見捨てる危険のないことは同様である。トマス・トラハーン*は、「すべての精神は、相互に惹きあう」と述べた。いつの時代でも、その時代の子どもの精神は、児童文学というものを築きあげてきた、これらの本の作者たちの精神に、